

中国、台湾における九年一貫教育課程と美術教育について

Nine-year School Curriculum and Art Education in China and Taiwan

山口大学 福田 隆 眞

はじめに

中華人民共和国（以下、中国）と台湾では教育改革を進め、教育課程の公布、実施がなされている。¹⁾ 中国では1999年に素質教育に関わる教育政策が公布され、それに基づいた改革が各方面で進められている。台湾では2000年に九年一貫教育課程が公布され、2001年から順次実施されている。どちらの教育改革も大規模なもので21世紀での新しい社会と人間作りに取り組んでいる。いずれも、初等教育と中等教育を義務教育として一貫して捉えた教育課程を設定し、全体として総合化に向かっている。

本稿では、中国と台湾の九年一貫の教育課程と美術教育の教育課程の内容を紹介し、両者の特徴とわが国への示唆をまとめとする。

I 中国の現行教育課程について

中国では1999年の素質教育の政策の公布の後に、2001年には義務教育課程設置実験方案が公布され、義務教育段階の教育課程全般の内容が規定された。²⁾ 以下では、これに基づいて、義務教育課程の目標、原則について述べる。

義務教育課程の目標は、中国共産党の教育方針を貫くもので、時代の要求を表している。全体目標として次のように記されている。

学生（児童、生徒の総称）に愛国主義・集団主義精神をもたせ、社会主義を愛させる。中華民族の優秀な伝統・革命を受け継がせ、発揚させる。社会主義民主法制に対する意識を持たせる。国家法律・社会道徳を遵守させ、正しい世界観・人生観・実践力・価値観を形成させる。社会的責任感を持たせる。そして、人民に奉仕する。創造精神・実践力・科学と人文の素養・環境意識を持たせる。生涯学習のための基礎知識・基本技能と方法を持たせる。心身ともに健康な体を養う。健康的な審美眼と生活習慣を育成する。理想・道徳・文化をもち、法律を守る人間を形成する。³⁾

この目標は社会主義体制の堅持とともに個人の素質、創造性の育成を強調している。国家としての社会体制の堅持だけでなく、その中で個人が資質を備えることを強調しているといえる。

次に、義務教育課程の原則としては、バランス、総合性、選択性を重視している。⁴⁾

バランスのある教育課程ということでは、道徳・知恵・健康・審美眼などを全面的に発達させることを意味している。これは素質教育政策に基づくものである。学校や地域の実情に合わせた教育課程の設定や、学生の発達に適した九年一貫教育課程の設置を促すものである。

教育課程の総合性は科学的知識、社会生活、経験を総合的に扱うものである。従来の科学的知識だけを重視するのではなく、全面的な発達を促すために総合的に育成することを目指している。その例としては、1、2学年の「道徳と生活」の課程、3から6学年の「道徳と社会」の課程で、子どもの生活範囲の広がりや生活経験の豊富さを考慮することを示唆している。また、3学年から9学年の「科学」課程では生活経験から探求の過程を体験させることや学習方法を習得することを指摘している。1学年から9学年までの「芸術」課程では多様な芸術体験と審美趣味を促している。さらに教科として「総合実践活動」を増設し、情報技術教育、研究方法の学習、地域への奉仕、社会実践、労働、技術教育を含む内容としている。これはわが国の総合的な学習の時間と類似した内容といえる。

各学年の教科の構成は次のようになっている。⁵⁾

1学年 道徳と生活、国語、数学、体育、芸術（或は音楽、美術）、学校裁量（1週26授業時間）

2学年 道徳と生活、国語、数学、体育、芸術（或は音楽、美術）、学校裁量（1週26授業時間）

3学年 道徳と生活、科学、国語、数学、外国語、体育、芸術（或は音楽、美術）、総合実践活動、学校裁量（1週30授業時間）

4学年 道徳と生活、科学、国語、数学、外国語、体育、芸術（或は音楽、美術）、総合実践活動、学校裁量（1週30授業時間）

5学年 道徳と生活、科学、国語、数学、外国語、体育、芸術（或は音楽、美術）、総合実践活動、学校裁量（1週30授業時間）

6学年 道徳と生活、科学、国語、数学、外国語、体育、芸術（或は音楽、美術）、総合実践活動、学校裁量（1週30授業時間）

7 学年 思想と道徳、歴史と社会（或は歴史、地理）、科学（或は生物、物理、化学）、国語、数学、外国語、体育と健康、芸術（或は音楽、美術）総合実践活動、学校裁量（1週34授業時間）

8 学年 思想と道徳、歴史と社会（或は歴史、地理）、科学（或は生物、物理、化学）、国語、数学、外国語、体育と健康、芸術（或は音楽、美術）総合実践活動、学校裁量（1週34授業時間）

9 学年 思想と道徳、歴史と社会（或は歴史、地理）、科学（或は生物、物理、化学）、国語、数学、外国語、体育と健康、芸術（或は音楽、美術）総合実践活動、学校裁量（1週34授業時間）

以上の教科の構成を見ると、初等教育と中等教育の段階で区分はあるが、各教科の教育課程が施行されているので内容的な一貫性を有していると考えられる。

この九年一貫の義務教育課程の特徴について森脇健夫は次の6点を指摘している。⁶⁾①創新教育。創新とは動的に現在の様々なものを反省するということで、改革のキーワードである。②人間中心の教育課程を作り上げる。学科中心の知識の習得から人間の発展中心へと転換。③学習内容の選択性の導入。④学生の興味・関心を尊重し、教育内容への反映。⑤課程管理の弾力化。⑥評価方法の改善。

以上のように、中国の教育改革は素質教育をもとに教育課程での弾力化が図られ、総合的な教育課程を実施し始めている。

II 中国の美術教育課程について

義務教育課程の改革により美術教育の教育課程も2001年に「美術課程標準」として公布された。⁷⁾課程標準は従来の「教学大綱」が教科の知識や教育目標を記していたものを改訂し、児童・生徒の共通の資質を全面的に捉えて教育を実施するための基準である。

美術教育の価値や意義として次の5点を述べている。

- ①学生の情操を陶冶し、審美眼を高める。
- ②学生に文化の継承や交流を促す。
- ③学生の感知力や形象による思考力を発展させる。
- ④学生の創造力や技術意識を形成する。
- ⑤学生の個性を形成することと全面的な発達を促す。

これらは素質教育を基本としているもので、情操や感覚の育成とともに、創造力、技術力、思考力の発展、そして文化の継承として知識や理解も内包している。

さらに美術教育の基本理念として、美術的素養の形成と学習内容への興味を指摘している。そしてこれらは発達段階を重視し、人文的精神や審美眼を基礎とするように促し

ている。美術を教科として設定してはいるものの、その存立においては幅広い芸術や人文的素養によるものとしている。

美術課程標準では学習内容を4つの学習領域に分けている。それらは、①造形・表現、②設計・応用、③鑑賞・評論、④総合・探索、である。この内容の設定について次のように述べている。

美術の学習活動は創作と鑑賞の二つの類型に分けられる。創作と鑑賞は外在化と内在化の両方に関係があるにも拘わらず、創作は外在化の傾向に偏っており、鑑賞は内在化の傾向に偏っているのである。美術学習は操作性が強いいため、創作活動に比重が置かれている。造形・表現は美術活動の基礎であり、活動方法は自由な表現や大胆な創造及び感情と認識を強調している。設計・応用は発想を重視するだけでなく、活動の効果も重視するのである。つまり、前者は自由を重視し、後者は効果を重視するのである。鑑賞・評論は体験や鑑賞と表現などの方法で知識を内在化し、審美的な心理を形成させることを重視している。⁸⁾

そして総合・探索の学習領域は総合的実践力と探求力を発達させるために設定されたもので、他の教科、或は学習領域との連携や現実社会との連携をとることによって幅広い内容を習得し、能力を育成しようとするものである。

次に、新たに設定された4つの学習領域について次のように規定している。⁹⁾

①造形・表現

造形・表現は多種の材料や手段で、造形の楽しさを体験し、思想や感情を伝達する学習分野である。ここでの造形は描画や彫刻などの手段で視覚芸術創作の活動を行うことである。表現は美術創作活動を通して、観念や感情を伝達することである。造形と表現は美術創作活動の二つの面であるが、造形は表現の基礎で、表現は造形の過程や結果で実現するのである。本学習分野は低学年段階で感じることや体験や遊びを強調し、見る、描く、作る、遊びを一体的に融合し、教科の限界を明確にしないで拡大することができる。

②設計・応用

設計・応用はある材料や手段で、ある目的や用途をめぐって、デザインや制作を行い、情報交換をし、環境や生活を美化し、デザインの意識や実践力を培う学習分野である。このデザインは学生の生活に関する現代デザインの基礎と伝統工芸を含んでいる。

③鑑賞・評論

鑑賞・評論は学生が自然美や美術作品などの視覚世界に対する鑑賞と評論を行い、徐々に審美力を高める学習分野である。鑑賞で審美体験ができるほかに、言葉や文字で自

然美や美術作品などの視覚世界に対する体験や認識、理解を述べるものである。

④総合・探索

総合・探索は総合的な美術活動を通して、学生が主体的に探索、研究し、総合的に問題を解決できる学習分野である。そこには次の3つの意味がある。1) 美術の各学習分野(造形・表現、設計・応用、鑑賞・評論)を一体化すること。2) 美術と他の学科を互いに総合させること。3) 美術と社会を関連させること。この3つはある程度横断的に捉えられる。

この4つの学習分野は発達段階で段階的に目標が定められている。義務教育課程の美術課程標準は九年一貫の内容を定めることにより、従前に比べ発達段階を重視し、個人の資質の開発を育成しようとするものである。発達段階を踏まえた段階目標として次のように設定されている。¹⁰⁾

①第一段階(1、2学年)

多種の道具を試み、紙及び身近なメディアで、見る、描く、作ることを通して、大胆に自由に自分の見聞、感想を表現し、造形活動の楽しさを体験する。身近にある様々なメディアを使ってみる。見る、描く、作ることを通して、簡単な構成と飾るためのデザインの楽しさを体験する。自然や様々な美術作品の形や色を鑑賞し、簡単な言葉で自分の感想を大胆に表現することができる。造形ゲームを通して、テーマのあるものやないものの想像、創作、パフォーマンス及び展示を行う。

②第二段階(3、4学年)

形、色、テクスチャーなどの美術用語をある程度知る。様々な道具を使い、様々なメディアの効果を体験する。見る、描く、作ることを通して、大胆で自由に自分の見聞、感想を表現し、豊かな創造力と創造意欲を引き出す。対比と調和、対称と均衡などの構成の原理を学ぶ。簡単なデザインと装飾をする。デザインの制作と他の美術活動との違いを体験する。自然や各種の美術作品の形、色、テクスチャーを鑑賞する。口頭や文書で鑑賞対象を述べ、自分の感想を表現できるようにする。造形ゲームを通して、国語、音楽などの内容と結びつけ、美術創作、パフォーマンスと展示を行い、自分の創作意図を発表する。

③第三段階(5、6学年)

形、色、テクスチャーと空間などの美術用語を使い、自分なりの道具と材料で絵や立体造形に表現する。自分の見聞や感想を記録し、構想力、創作力を伸ばし、自分の考え方や感情を伝える。対比と調和、対称と均衡、リズムとメロディーなどの構成の原理を使い、簡単な創意やデザインやメディアの方法を理解し、デザインと装飾を行い、身近な環境を美しくする。自然美と美術作品の材料、形式内容

などの特徴を鑑賞し理解する。描写、分析などの方法によって、美術表現の多様性を知る。簡単な美術用語を使い、美術作品に対する自分の感想と理解を表現することができる。学校と地域の活動を結びつけ、美術と科学の課程及び他の課程の知識、技能を結びつけることで、計画、製作、展示などを行い、美術と環境及び伝統文化の関係を体験する。

④第四段階(7-9学年、日本の中学校1-3学年に相当)

形、色、テクスチャー、空間、明暗などの視覚言語を活用し、材料、用具を適切に選択し、絵画と彫刻の様式によって様々な創造方法を探究する。個性的な表現を発展させ、自分の思想や感情を伝達できるようにする。デザインの種類と機能を理解する。対比と調和、対称と均衡、リズムとメロディー、多様性と統一などの組み合わせによる原理を活用し、材料の特徴を生かしてデザインする。生活を美化するとともにデザインの意識を養う。自然美、美術作品の様式、内容、使われた材料などをあらゆる角度から鑑賞し、認識する。中国と外国における美術の発生と発展について理解する。人類の文化遺産を大切にする気持ちを育成する。美術作品、美術現象などについて評論する。調査によって、美術や伝統文化と環境に関係があることを理解する。美術の手段で記録し、計画し、制作する。しかも他の教科の勉強を通して、共同のテーマや共通の原理を理解できる。

以上に見るように、九年一貫の課程標準では発達段階を重視し、材料、用具、視覚言語、認識領域、体験、他領域との関連などを段階的に明示している。

以上のような4つの学習分野と4つの段階の目標を設定し、初等中等の美術教育は幅広い資質を育成することを目的としている。基本理念として、「学生に基本的な美術の素養を形成させる」「学生が美術を学習することに興味を喚起する」「広範な文化的背景で美術を認識させる」「創造的精神と問題解決能力を育成する」「発展と促進のための評価を行う」としている。¹¹⁾ これらのことは旧来の美術の知識と技法の伝達という教育内容から大幅な転換をしているものである。美術の内容をより総合的に取り扱うようにし、児童生徒の主体性によって、創造力と問題解決能力を育成しようとしている。

美術の課程標準に基づく内容は、教育課程改革全体に関わることである。現在の中国の教育課程は、より総合化、実践化し、道徳、芸術、技術、科学的総合修養及び創造力、実践力の育成を重視している。

III 台湾の現行教育課程について

次に、台湾の教育課程について述べる。台湾は中国の一

つの省とされているが、独自に政府と政府機関である教育部が設置されている。ここでは台湾独自の教育改革の内容を述べる。

台湾では小学校においては2001年から、中学校においては2002年から教育課程の改訂が行われ、現在実施されている。この改訂の特色のひとつは九年一貫の教育課程の制定である。そして学習内容の枠組みを従来の教科から学習領域として幅広く捉えたことである。

九年一貫の教育課程は「小中学校九年一貫課程綱要」として公布された。その特色には以下のようなものがある。

- ①教育課程の編成は国民が必要とする基本能力を培うことを基本とする。
- ②従来の教科に代えて学習領域を設定し総合的な教育課程とする。
- ③学校と教師に自主的な指導の権限を与える。
- ④児童生徒の関心や能力に応じて教材や授業を組み立てる。
- ⑤課程、指導、評価を緊密に連携する。
- ⑥国際化に対応し小学校5学年から外国語を導入する。
- ⑦授業時間の削減を行う。
- ⑧教師、学校、地方に教育の権限を与える。¹²⁾

このことは台湾が21世紀に向けて国民の資質向上と、国家の競争力を高めようとするものである。台湾はわが国と類似した状況にあり、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題、高齢化・少子化などの問題を抱えている。こうした状況を改善するために教育改革が実施され、上記のような内容によって資質の高い人材育成を図ろうとしている。

台湾は健全な人格で民主的素養、法治観念、人文素養、思考力や判断力、創造力を備えた人材育成を目指している。

九年一貫の教育課程の目標、基本能力として、以下のことを定めている。¹³⁾

- ①自分を理解し、潜在的能力を発揮させる。
- ②鑑賞、表現、審美及び創作の能力を培う。
- ③人生設計、生涯学習の能力を向上させる。
- ④表現、コミュニケーション、喜びなどを分かちあうことを養う。
- ⑤他者を尊重し、社会に関心を持ち、団結する精神を高める。
- ⑥文化学習と国際理解を促進する。
- ⑦企画、構想、実践の能力を促進する。
- ⑧科学技術と情報を運用させる。
- ⑨自主的探索と研究の精神を育成する。
- ⑩独立志向と問題解決能力を育成する。

この目標や基本能力の設定は個性を伸ばし、素質を引き出し、個々の能力を育成しようとするもので、その方法は児童生徒の主体的態度、学習意欲によるものである。そのため中央集権的であった教育の権限を、教師、学校、地域に分権し、活性化を図ろうとしている。

台湾の教育改革の特色のひとつは従来の「教科」を撤廃し、新たに「学習領域」を設定したことである。九年一貫の教育課程では、個人の発展、社会文化及び自然環境などの側面から考慮し、「言語」「保健と体育」「社会」「芸術と人文」「数学」「自然と生活科学」「総合活動」の7つの学習領域が設定された。各学年の配置は次のようになっている。

1 学年 国文、保健と体育、数学、生活、総合活動（週22-24授業時間）

2 学年 国文、保健と体育、数学、生活、総合活動（週22-24授業時間）

3 学年 国文、保健と体育、数学、社会、芸術と人文、自然と生活科学、総合活動（週28-31授業時間）

4 学年 国文、保健と体育、数学、社会、芸術と人文、自然と生活科学、総合活動（週28-31授業時間）

5、6、7、8、9 学年 国文、英語、保健と体育、数学、社会、芸術と人文、自然と総合活動、生活科学（5、6 学年30-33、7、8 学年32-34、9 学年33-35授業時間）

「言語」の学習領域は、国語、英語などを含んでおり、聞く、話す、読む、書くことを重視し、基本的なコミュニケーション能力を育成し、文化や習俗などの内容を学習する。「保健と体育」の学習領域は、心身の発達、保健、運動、健康、生活習慣などの内容を学習する。「社会」の学習領域は、歴史、文化、地理、環境、社会制度、道徳規範、郷土の教育などの内容を学習する。「芸術と人文」の学習領域は、視覚芸術、音楽、演劇（身体表現）などの学習を含んで、芸術と文学の興味と嗜好を促進し、積極的に芸術と文学の活動に参加することができるようにし、感銘する力、創造力、想像力などの芸術の能力と素養を向上させる。「自然と生活科学」の学習領域は、生命を尊重することを培い、環境を愛護して、科学技術と情報を有効に使い日常生活に実践する。「数学」の学習領域は、数、形、量の基本概念を認知し、計算能力、組織能力を備えて、日常生活で応用ができるように他の学習領域と題材を連携して学習する。「総合活動」の学習領域は、実践、体験と反省などの体験活動であり、団体活動や学校でのバザー、奉仕作業なども含んでいる。

以上のように、台湾では教育改革にともなって小学校中学校での授業形態が大きく変わってきた。こうした状況で美術教育も教育内容が変わりつつある。次章では従来までの美術教育の内容が含まれている学習領域の「芸術と人文」について内容を述べる。

IV 台湾の学習領域「芸術と人文」について

台湾での美術教育は、従来、小学校では「美勞」中学校

では「美術」の教科で実施されていた。2001、2002年の教育課程の改訂により、現在は小学校1、2学年では学習領域「生活」で、小学校3学年以降は学習領域「芸術と人文」の中で行われている。これは美術に関わる教育を造形表現だけで捉えるのではなく、芸術の概念や枠組みで捉えて、音楽、文学、舞踊という関連する領域を含んで実施しようとするものである。芸術を通して、人文の素養を培う芸術学習の一部に美術教育が位置づけられたのである。

この学習の範囲は視覚芸術、音楽、実演芸術などを含み、芸術活動や芸術鑑賞のレベルを向上させることによって人格の全体的発達を健全に促すものである。

美術を芸術に包括させて教育をすることの意義について次のように述べられている。「美術や音楽を統合した全面的な芸術教育をすることによって、児童と青少年が、音楽、舞踊、演劇または視覚芸術などの活動の中で、芸術に対する自分の感情を分析、理解し、批評や評価をすることができ、芸術作品の文化的背景と意味を認識することができる。そのことは他の学習にも役に立つ。芸術と人文の教育は技術教育や狭い分野の教育から徐々に離れて、もっと自主的で、開放的、全方位的な芸術の学習になる。」¹⁴⁾ また、芸術の根源は生活の中にあるとして、芸術と生活の融合を促している。芸術教育は生活環境の中での人と物との関係、様々な芸術作品、物品と背景との関係などを通して、時代、文化、社会、生活と芸術との関係を理解することができる。そして美術の分野だけでなく、芸術を融合した表現の教育を促すものである。

この学習領域は目標を内容に即して、「探究と創作」「審美と理解」「実践と応用」の3つに分類している。それらの内容は以下である。

①探究と創作：学生（児童生徒の総称）は自己探究、環境と個人との関係を認知し、メディアと表現形式を使って芸術表現を行い、生活と精神を豊富にする。

②審美と理解：学生は鑑賞と文化活動を通して、様々な芸術価値を認識し、芸術作品の様式及び文化の脈絡を理解し、さらに多元的文化の芸術活動に熱心に参加するようにする。

③実践と応用：学生は芸術と生活の関連を理解し、芸術活動を通して環境を知覚する。芸術の職業を認識し、芸術的視野を広げる。芸術創作を尊重し理解し、生活の中で実践する。¹⁵⁾

これは芸術表現と鑑賞の全てに共通する目標になっている。そして、具体的には九年一貫の教育の過程で段階的に目標を以下のように設定している。¹⁶⁾

①第一段階（1、2学年）

探究と創作

- ・ 様々なメディアの試作を通して豊富な創造力を引き出

す。さらに、視覚、聴覚、触覚などを通して芸術活動を行う。創作の喜びと満足を体験する。

- ・ 視覚、聴覚、触覚の芸術創作を活用し、自分の受け止め方と考え方を表現する。
- ・ メディアと芸術形式の結合を活用し芸術創作の活動を行う。

審美と理解

- ・ 自然物、人工物と芸術作品に触れ、審美感を体験する。
- ・ 色、画像、音声、メロディー、姿勢、表情などの美感を体験し、自分の感覚を表現する。
- ・ 地域の芸術活動に参加し、生活環境の芸術文化を認識し、芸術と生活の関係を体験する。

実践と応用

- ・ 芸術創作を通して自分と他人、自分と自然と環境の関連を感じとる。
- ・ 芸術活動や芸術の実演を鑑賞する態度を身につける。
- ・ 芸術創作の形式あるいは作品などを活用し、楽しく生活をする。

②第二段階（3、4学年）

探究と創作

- ・ 様々なメディアや形式を実験的に体験し、技法や効果を理解し、創作活動を行う。
- ・ 様々な芸術創作を試み、豊かな想像力や創造力を習得する。
- ・ 芸術創作の活動に参加し、自分自身の方法で技法や感覚を獲得する。
- ・ チームで分担、計画し、芸術創作活動を行う。

審美と理解

- ・ 様々な自然物や人工物、芸術品の美しさを鑑賞する。
- ・ 友達の作品を鑑賞し、美的特徴を述べる。
- ・ 地方の芸術文化の活動に参加し、自分の地域の芸術文化を理解する。
- ・ 生活周辺における遺跡や民芸記念物の鑑賞を楽しむ。

実践と応用

- ・ 地域の生活芸術を認識し、自分の方法で生活に採り入れる。
- ・ 鑑賞と討論を通して台湾の芸術を認識し、先祖からの芸術成果を尊重する。

③第三段階（5、6学年）

探究と創作

- ・ 芸術創作の主題や内容を構築し、適切な媒体や技法を選び、感情や経験や思考で満たされた作品を完成する。
- ・ 技術と連結し、新しい創作の経験と形式を開発する。

審美と理解

- ・ 説明、分析、討論の方法を通して、自然物や人工物や

芸術品の美的特徴や視覚的要素を認識する。

- ・ 視覚芸術の専門用語を正確に使用し、自分と他人の作品の特徴を説明し価値判断する。
- ・ 芸術活動に積極的に参加し、異文化の特徴や文化的背景を比較する。

実践と応用

- ・ 多様な方法によって視覚芸術の情報を収集し、その習慣を身につける。
- ・ テーマを選択し、芸術品を収集し、純粋芸術、商業芸術、生活芸術、民族芸術、伝統芸術などを日常生活の一部に採り入れる。

④第四段階（7、8、9学年）

探究と創作

- ・ 芸術創作の主題や内容を構築し、適切な媒体や技法を選び、感情や経験や思考で満たされた作品を完成する。
- ・ 様々な芸術形式を通して、自分の特質を表し、自己分析し評価する。

審美と理解

- ・ 様々な自然物、人工物、芸術品を鑑賞し、美的認識や判断をする。
- ・ 芸術と科学技術との関わりを考え、芸術における環境や資源からの影響を吟味し、建設的な見解を提出する。

実践と応用

- ・ 日常生活のなかに芸術表現と鑑賞の興味や習慣を養う。
- ・ 計画的な創作と活動を通して、協力、尊重、秩序、コミュニケーション、協調性などの精神や態度を主体的に養う。
- ・ 自己の性格と興味と能力に適した芸術活動を選択して学習を続ける。

こうした段階的な目標の設定の下に、個々の教材が開発されている。現在刊行されている教科書¹⁷⁾では、多くの題材は、一つのテーマに基づいて、視覚芸術、音楽、身体表現、演劇、舞台芸術に分けて表現を行っている。演劇、舞台芸術は視覚芸術、音楽、身体表現を融合・統合した表現である。また、放送としての表現も題材として紹介されている。

学校や教師の裁量も増えて、美術教育の表現の広がりも期待できる。また、地域との連携を密にして教材開発を行うことも増えてきている。¹⁸⁾

V まとめと考察

前章までに中国と台湾の教育課程全体の概要と美術教育に関する教育課程を述べた。中国も台湾も大きな方向としては教育課程の総合化へと向かっている。以下に、教育課

程全体、美術教育の教育課程、わが国への示唆について述べ、まとめとする。

① 教育課程全体について

中国も台湾も九年一貫の教育課程を実施し、発達段階を踏まえながら初等教育と中等教育の連携を緊密にしようとしている。特に中国では各教科に一貫性を持たせ段階目標を設定している。また、中国も台湾も素質や資質の教育に関わり、主体性を育み、創造力を育成しようとしている。そして小学校と中学校での連続性のなかでそれらの育成を図ろうとしている。

②美術教育の内容について

中国は現段階では、美術が教科として単独に存在している。その内容は新たな枠組みによって学習分野が柔軟な取り扱いになっている。「造形・表現」では絵画や彫刻を含み造形遊びを加味した幅広い内容である。「設計・応用」はデザインの能力を育成するもので生活や産業に連携するものである。また、新たに「総合・探索」によって美術の領域に限らず幅広く他の領域、社会への関係を深めて経験による学習が設定されている。こうした美術の教科の中での総合化と教科を越えた総合化を図ることは、教育課程全体の総合化に沿った内容となっている。国家の発展を目指して、経済の発展と社会の発展のために素質教育が政策として公布され、教育課程はそれに沿って実施されている。また、美術の教科書は現在刊行されつつあり、今後の整備とともに新しい教育課程の実績が得られると思われる。新しい教育課程の実現のためには時間を要することも予測されるが、¹⁹⁾ 大きな改革に向かっていることは事実である。

一方、台湾はわが国と類似した状況から教育改革がなされていると考えられる。経済の安定成長、少子化、国際化、情報化社会への対応である。中国のように直接的に素質教育を謳ってはいないものの、教育課程の総合化によって資質の教育へと迫っている。教育内容を広領域化して柔軟な取り組みと創造力の育成を目指している。教科を学習領域に組み替えたことで、美術教育は実際には量的な内容が縮減された。また、少子化にともなう教員の削減も予定されている。こうした状況で、「芸術と人文」の教育を行うにはいくつかの問題を抱えている。教員数の不足、教員の力量不足などである。²⁰⁾ しかし新たな特質として、音楽と美術の教員の連携や教材開発も出現している。教科書もほぼ刊行されている状況であるから、時間的な経過とともに実績が得られるであろう。このことについて、林曼麗は「現段階はまだ、実施され始めたばかりなので問題もあるが、時間が経てば新しい芸術表現を生み出すことになるだろう」と述べている。²¹⁾

③わが国への示唆

わが国は平成元年、10年の教育課程の改訂によって資質の向上を目指し、主体的な学習、基礎・基本の習得、確かな学力の習得、生きる力の獲得などを実践している。学校週5日制によって美術教育は授業時数が削減されていくつかなの問題を生じている。こうした状況において、授業時数が確保されて基礎・基本の習得がなされるならば、教科の総合的な扱いによって幅広い芸術表現の教育も可能であろう。そのために小学校と中学校の美術教育の内容を通低し、発達段階と基礎・基本を考慮した一貫性のある教育課程を設定することが一つの方法と考えられる。

注

- 1) 台湾は政治的には中国の一部の台湾省とされているが、社会体制、教育課程等においては異なっているので、本稿では同じレベルで内容の考察を行うため、中国と台湾を併記する。
- 2) 中国教育部基礎教育中心「義務教育課程設置実験方案」2001
- 3) 前掲2
- 4) 前傾2の資料を基に述べる。
- 5) 前傾2及び唐磊「中国における教育課程の政策の動向」教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報 vol.3 2003 による。
- 6) 森脇健夫「中国教育課程改革の動向－教育改革（2001～）」三重大学教育実践総合センター紀要 第23号 2003 p65
- 7) 中国教育部基礎教育中心「美術課程標準」（実験稿）2001 本項目においてはこの資料を基に述べる。
- 8) 前掲7
- 9) 前掲7
- 10) 前掲7
- 11) 前掲7
- 12) <http://teach.eje.edu.tw/9CC/brief/brief7.php> 「修訂課程及特色」
- 13) <http://teach.eje.edu.tw/9CC/brief/brief3.php> 「課程目標」
- 14) <http://teach.eje.edu.tw/9CC/fields/2003/artHuman-source.php> 「藝術人文」
- 15) 前掲14
- 16) 前掲14より視覚芸術にかかわるものを抜粋して紹介する。
- 17) 「生活」1、2（康軒文教）2002、2004及び「芸術と人文」3上から6上（康軒文教）2004、及び「芸術と人文」国中1上から3上（康軒文教）2004を参考にした。
- 18) 高雄市の一部の小学校では学校全体に「芸術と人文」の学習成果を展示している。また、美術館との連携によって鑑賞活動も充実させている。（屏東師範学院の黄教授の指導によるもので、2004年5月の調査による。）

- 19) 伊麗は、日本の状況と中国の状況を比較し、中国の新しい教育課程を実施するための整備を造形遊びや鑑賞を例に述べている。「中日における美術教育の比較」日本教科教育学会誌第28巻第2号 2005 pp.58-59
- 20) 2004年8月28日の劉佳文の王豊聖（台湾国民中学教員）へのインタビューによる。（劉佳文「台湾の美術教育の現状及び発展に関する考察－義務教育段階について－」山口大学大学院教育学研究科修士課程修士論文 2005
- 21) 台湾台北師範学院教授、国立故宫博物院副院長。2005年4月16日のインタビューによる。

参考文献

- ・福田隆真他「中国における新教育課程と美術教育について」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第18号 2004
- ・森脇健夫「中国教育課程改革の動向－教育改革（2001～）」三重大学教育実践総合センター紀要 第23号 2003
- ・付宜紅「21世紀における中国の教育改革への挑戦」日本教科教育学会大会発表資料 2004
- ・呉非「中国の音楽科カリキュラムの現状と課題」日本教科教育学会大会資料 2004
- ・唐磊「中国における教育課程の政策の動向」教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報 vol.3 2003
- ・鐘啓泉、方明生「21世紀最初の10年間ににおける中国教育課程改革の課題」カリキュラム研究第13号 2004
- ・謝安邦「中国における学力向上策－基礎教育課程の改革－」比較教育学研究第29号 2003
- ・福田隆真、劉佳文「台湾における初等美術教育の教材について」山口大学教育学部研究論叢 第53巻第3部 2003
- ・福田隆真、劉佳文「台湾における芸術と人文の美術分野の内容について」山口大学教育学部研究論叢 第54巻第3部 2004
- ・段薇清「中国の教育改革における学校教育の素質教育と美術教育」大学美術教育学会誌第36号 2003
- ・王文純 石崎和宏「台湾」（国立教育政策研究所「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(16)図画工作・美術のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－）収録 2003
- ・劉佳文「台湾の美術教育の現状及び発展に関する考察－義務教育段階について－」山口大学大学院教育学研究科修士課程修士論文 2005

付記

本論文を作成するにあたり、中国語の文献については、山口大学留学生の段薇清、麻麗絹、李金定、劉佳文の協力を得た。また、台湾の美術教育については劉佳文の協力を得た。

Nine-year School Curriculum and Art Education in China and Taiwan

FUKUDA, Takamasa

Yamaguchi University

This article focuses on the contents of art education in China and Taiwan where educational reforms are currently in progress. In China, a large-scale educational reform is being implemented based on the policy of talent education. Its curriculum for compulsory education consists of a nine-year continuous curriculum for each subject that is also based on this policy. In the subject of art, learning areas have been re-divided into four areas for the purpose of developing learners' ability to put a theory into practice and to investigate. It is also encouraged that these areas are linked with other learning areas.

In Taiwan, the curricula for primary schools and lower secondary schools were revised in 2001 and 2002 respectively in order to implement a nine-year continuous curriculum. In Taiwan, subjects have been reorganized into learning areas so that they can be taught in an integrated way. The subject of art was included in the learning area of 'Arts and Humanities' and its curriculum was revised in order to develop learners' various abilities of artistic expression.

Both in China and Taiwan, educational reforms are promoting integrated approaches in dealing with the learning contents. It is clear that in art education this policy change means the emphasis on fostering creativity through comprehensive self-expression. Art education in Japan can learn from the Chinese and Taiwanese experience. In the future of art education in Japan, provided that teaching hours are secured, the integration of the learning contents may be a possibility.